

杉の子

奥多摩町立氷川小学校
学校だより 4月号
令和4年4月6日発行

御入学・御進級おめでとうございます

校長 松井 良

お子様の御入学・御進級、おめでとうございます。教職員一同、この日を楽しみにしておりました。令和4年度は、新入生8人を仲間に加え、全校児童54名でのスタートです。

新型コロナウイルス感染症の猛威に震えながら迎える3回目の春となりました。世界中の心配事とは無縁に、今年も桜はきれいに花を咲かせました。新しいステージの始まりを、彩り豊かに祝ってくれているようです。

一昨年度、全国で一斉休校となり児童・生徒の未履修を心配する声の中から、欧米に習い9月から新年度スタートとする案がマスコミ等で論じられました。春始まりと秋始まりのメリット・デメリットを挙げながら、様々な立場の方が話し合っている様子を多くのメディアが取り上げていました。

日本の学校が春から始まるようになったのは明治時代の中頃で、公立学校の予算執行の都合上、行政の会計年度に合わせて4月から新年度がスタートするようになったそうです。行政の会計年度が4月から始まるのは、農業国日本ならではの理由で、秋に収穫した米を換金し、税金として納め、納められた税金の額から予算編成するには、4月1日～3月31日という年度設定が適していたとのことです。

日本では、四季を「春夏秋冬」と言い、「春」が先頭にきます。1年間を24の節気に区切る「二十四節気」の始まりは、「立春」です。清少納言の「枕草子」も、「春はあけぼの…」で始まります。アントニオ・ヴィヴァルディ作曲の「四季」も、「春」から始まります。フランス語では「春」を「プランタン (Printemps)」、イタリア語では「プリマヴェーラ (Primavera)」と言いますが、これは「第一の」を意味する接頭語「プリ(pri-)」が使われていて、「第一の季節」ということのようにです。

「春」の語源は植物の芽が膨らむこと「芽が張る(ハル)」から来ているとも言われます。「芽が張る」という現象が、大きく成長していくことの予兆を感じさせるせいか、「春」という季節は、単なる4つの季節の1つという捉えだけでなく、「新たな」や「始まり」というようなワクワクした気持ちを連想させてくれます。

四字熟語「一陽来復」とは、冬が去り春が来るということが転じて、悪いことが終わった後に幸運が開けることという意味で使われます。戦乱やコロナ禍の世が明ける春となることを願わずにはられません。

どの子も入学・進学に伴い、新しいことに挑戦しようと胸を膨らませていることと思います。学校は一人一人の胸に張る(春)芽を、大輪の花として咲かせることができるよう、鍛え導いていくことが責務であります。小規模校の利点を生かしながら、一人一人の思いに寄り添い、一人一人に適した支援で、「通いたい学校」「通わせたい学校」と感じていただけるよう努力してまいります。

今年度も、本校の教育活動に温かい御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

児童の様子は、氷川小学校ホームページにて紹介しております。毎日の更新を心がけて、子どもたちの生き生きとした様子をお伝えします。ぜひ御覧ください。

<https://www.rlco.jp/hikawasyo/>

